
とある神童の挫折

鏡花水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある神童の挫折

【Nコード】

N5000R

【作者名】

鏡花水月

【あらすじ】

神童：暁天馬は上岡中学校屈指の天才だった。彼と少女は学区トップの公立高校の受験を控えていた。だが、彼等が見下す1人の少年により、彼等は挫折する。

（前書き）

リアルホラーです。あと、法律とか結構無視してます。お気を付け下さい。

少年の名前はアカツキンマ暁天馬。少女の名前はオオトモスハ鳳瑞葉。

この二人は上岡中学校第3学年の成績トップ1とトップ2であった。曰く、鳳は県下一の有名難関私立校、星間学院高校を受験し、奨学生つきで合格した。

曰く、暁は学校のテストで満点以外を採ったことが無く、神童とすら呼ばれていた。

3月9日。二人は県下一の県立高校である晴嵐高校を受験する。誰も二人の合格を疑わなかった。それなのに。

「クソッ……アイツさえ……アイツさえいなければ!!」

HR直前。多くの生徒がバタバタと教室に飛び込んでくる中、天馬は悪態を吐いた。

2月27日。その日の日直となった天馬と瑞葉は放課後、帰宅の準備の途中だった。

「ねえ、天馬」

「なんだ」

瑞葉が明るい口調で話かけてくる。それに対し天馬はぶっきらぼうな調子で答える。

「好きな人とかいる？」

「いない。嫌いな奴はいるけど」

またぶっきらぼう。しかも返す答は淡白で短い。

「嫌いな人？」

「……………」

天馬は模索中ではない、嫌悪の為に答えるのを躊躇ったような沈黙をおいて一言。

「柿谷」

かきたにしょうま

柿谷翔麻。暁や鳳と同じ上岡中学校の3年生。もつとも神童と呼ばれた天馬や瑞葉とはかけ離れていて、馬鹿。最近よく見るような街中をうろついている軽薄な馬鹿であった。

DSで休み時間の度に友人をど突きまわして笑っていた。

天馬は柿谷のその行動や人柄、何より、あのレベルの低過ぎる知能が大嫌いだった。

瑞葉はクラスメイトをど突くさいに柿谷が見せるあの嘲笑が大嫌いだった。

「あー柿谷は確かにうざいよね」

人に嫌いとさらっと言い放った天馬に、瑞葉は苦笑い気味に言った。暁はすこしコメントを付けくわえる。

「フン。あんな馬鹿で甲斐性無しでそのくせ自分が好きなことしかないような物だからなアイツは。早急に死ぬべきだと思う」

平気で酷いことを言っているように聞こえるが、それが暁だった。

彼は現実主義者なのだ。人の命なんて放っておけばいつか燃え尽きて無くなる。

柿谷のようなクズの命なんかより自分のような優等生の命の方が大事に決まっている。

本気でそう考えていた。

「でも意外だね。天馬にも嫌いな人はいるんだ」

「人ごとのように言うが、御前もその1人だ。基本的に俺は“人間”が嫌いだからな。その中でも柿谷は」

「って、話の趣旨がずれてるよ。天馬に好きな人はいないの？」

瑞葉は大事なことを思い出し、笑いながら言った。

「鳳おおしりはいると思ってるのか」

「うん」

「さっきいらないと言ったばかりだが？」

瑞葉は天馬が言っていることを半分気にしていない。

「本当はいるんでしょ？」

「いないつつただろ？」

天馬はさっさと教室から出ていった。最後に

「あ、鳳、教室の鍵頼む」

と残して。

3月5日。天馬は早朝のクラスに入る。教室の中にはまだ疎らにしか人がいない。

「おはよー暁」

「いつも早いねー」

クラスメイトの女子二人が話しかけてきた。それに対し天馬は

「ああ」

とだけ返す。

「おう、暁」

また自分を呼ぶ声を聞いて振り返る。

だが、そこにいるのが柿谷翔麻であると分かった瞬間、彼は返事もせずにフンと鼻を鳴らして踵を返した。

「おい！ テメエ！」

柿谷は無視されたことが気に食わないのか、天馬に詰め寄った。

「人が挨拶してやってんだからよオ、返事くらいしろよ」

「はぁ？」

天馬は柿谷の言葉を、

「御前は人じゃないだろ。人の姿をしたゴミだ。ゴミはゴミらしく大人しくしてろ。大体ゴミ如きが俺に挨拶するな」

と罵倒の塊で切り捨てる。元々罵倒を一番嫌っていた柿谷にとってそれらは鬼門だった。

「オイテメエ。屑のくせに人みゴミゴミ言ってるじゃねーよ」

そう言って柿谷は天馬の首を締めあげようと、うなじに手を添えた。だがその瞬間、天馬は180°回転し、彼の手に握られた柿谷の手

は有り得ない方向を向いていた。

「勉強も出来ない、甲斐性も無い、他人に対する思いやりの一つすらない御前に屑と言われるのは心外だな。自分だって俺に無視された拳句ゴミと言われる理由はよく分かってんだろぅが」

そう言つてゆっくり手を放す

「は？ 俺ゴミでも屑でもねーよ。俺スポーツ出来るからな。なあそうだろ？」

柿谷が自分が屑ではないことを証明しようと周りにいる全員を指さして煽りたてていった。

皆苦笑い気味に頷いていったが、瑞葉だけが、

「知らん」

と短く言つてそれきり黙ってしまった。

天馬は

「スポーツが出来てスポーツ選手になれるならともかく、御前は人並みには出来るというだけだろうが。そもそも御前見たいな軽薄な選手を採るようなチームなんざあるわけない」

と柿谷を見下すように一言。

放課後、天馬と瑞葉は教室の中に残っていた。

「鳳おおとり、その物差しとつてくれ。そっちの長い方」

「これ？」

「ああ」

学級の仕事で2人はカレンダー作成に勤しんでいた。

「天馬、昨日柿谷が嫌いつて言つたよね。それ私も分かるなあ」

突然、瑞葉がポツリと呟いた。

「そうか」

「だって、自分が気に入らないことがあつたらそれだけで机蹴るんだよ？ 優しくないよねえ」

「気にすんな。脳みそが腐りきってるから優しいことをしようとか
思わないんだよ」

柿谷は廊下を歩いていた。教室に忘れ物を取りかえる為に。

「……？」

もう5時近くなっている筈だが、教室の灯はついていて、中から人の話し声すら聞こえてくる。

まさか泥棒の類でもないだろう、とは思ったが、心配の種が消えな
いため、立ち止まってその会話を盗み聞きた。

『だって、自分が気に入らないことがあつたらそれだけで机蹴るん
だよ？ 優しくないよねえ』

『気にすんな。脳みそが腐りきってるから優しいことをしようとか
思わないんだよ』

柿谷の呼吸が止まった。

始めて知った。あの2人が自分に対してどんな感情を抱いているか。
今からでも改正するか？ 否、あと10日もすれば卒業だ。それ以
前に性格を改正してあの憎たらしいクソ野郎共に好感を抱いて貰っ
ても仕方がない。それよりも今まで罵られ、嘲られてきた鬱憤をは
らしたい。幸い、ポケットには1年生から奪って来たカッターが2
本。

ガラッ

教室の扉が開いた。

その音に反応した天馬と瑞葉が顔をあげる。柿谷から見て、天馬は
右に、瑞葉は左にそれぞれ水性マジックを手に行っていた。

カッターを持つ手を振りかぶる。どっちを狙うか、などは全く考慮
しない。カッターを、思いっきり投げ放つ！

「え？」

瑞葉を狙う軌道にのったそれはクルクルとブーメランのように舞う。

瑞葉はそれがカッターであると気づくのに数秒かった。

気づいて、動くことが出来なかった。あの鋭利物は必ず自分を傷つける。手痛い目に合わせる。瑞葉の大きな眼が更に大きく見開かれたその時、カッターは瑞葉の小さな顔に突き刺さるうとして

「危ない！」

咄嗟にだした天馬の右手に遮られた。

その守護の手に激痛が走る。だが天馬はその手を抑えて

「柿谷！ テメエ！」

と目の前の外道に怒声を浴びせた。だが怒り狂っている柿谷にはそんなことは分らない。ただ目の前のクソ野郎をぶちのめすだけ。

柿谷は側にあつた教卓を引っ掴むと、天馬に投げつけた。

ドゴン！！

瑞葉には一瞬、天馬が両手をたてて身の安全を図っていたように見えたと、それを気にしている暇はなかった。

柿谷は2本目のカッターを取り出すと、瑞葉の額の前で振った。痛みが無く、瑞葉は一瞬ホツとしたが。

一瞬後、彼女の視界に映つたのはパラパラと落ちる1？弱の短い毛。彼女の眉である。

瑞葉は悲鳴をあげそうになった。

受験時、生徒が見られるのはその学力だけではない。風紀や受験者自身の身だしなみも見られる。

その中で、眉毛を剃る、というのは受験生にとってかなりの鬼門である。学校の先生や、彼女が通う塾の先生も、眉毛は絶対に剃るなと告げている。眉毛を剃ったが最後、どんなに内申点が悪かろうと、どんなに本番の点数が良かろうと、風紀面で目をつけられ、切られてしまう。

「——っ！——っ！」

瑞葉の眉を更に剃り取ろうと、柿谷がカッターを振りかぶった瞬間、

その姿が右に飛んだ。

天馬が飛び蹴りをいれたのだ。彼はカッターを握る柿谷の右手を踏みつけ、先程柿谷が投げつけた教卓を

柿谷の上に乗せ、彼の自由を奪う。怒り半分、焦り半分の表情のままで天馬は言う。

「鳳、村山先生と田原先生呼んでこい」

「え……で、でも……」

「さっさとしろっ??」

いきなりの怒鳴り声に、瑞葉は肩を竦めて逃げるように職員室へ駆けだしていった。

瑞葉が去った後。天馬は柿谷を睨みつけた。強大な殺気の籠った眼で。

「柿谷……。この屑が。出しゃばったことしてんじゃねえよ……」
といて右手を握り締めようとする。

だが

「……?」

動かない。先程瑞葉を庇って傷ついた右手が、親指以外動いてくれない。

（ま……まさか!?)

右手は、皮膚を引き裂かれ、切られた骨が大きく露出しているのが見えるほど傷ついている。

天馬は愕然とした。骨を切られた、ということは恐らく手の神経も軽く切断されているだろう。そうすると最悪、一生手が動かないという場合もある。

柿谷に対する、不条理な怒りが沸き起こった。彼を侮辱し、その存在価値を踏みにじった。それは分かっている。だがだがここまでされることを自分や鳳瑞葉はしていたか? 一生右手を使わない、というハンデを負わされたまま生きなければいいのか? その前に受験はどうする? このままでは字が書けない。後10日。手首を動かして字を書こうにも10日では間に合わない。左手を使っ

書いても10日で慣れることはないだろう。そうすると、自分は受験に受からないのか？ 神童とすら呼ばれた身であるのに？

それに瑞葉はどうなる？ 彼女は眉毛を削られていた。こうなると恐らく合否の問題ではなく事実を隠蔽しようとする学校側が瑞葉に晴嵐高校を受けないように圧力をかけるだろう。上岡中学校の評判を落とさないように、と。

「……人の人生を奪うとは……本物の屑だな。柿谷」

「うつせえ！ どけ、くそやグアツ！」

怒鳴り返した柿谷を、天馬はさらに踏みつけ、冷やかな視線を落とす。

「し、失礼します！ 村山先生と田原先生はいらっしゃいますか！」
瑞葉の上ずった声が職員室内に響いた。

担任、村山響子。むらやまきょうこ 副担任、田原昇一郎。たはらしやういちろう

呼ばれた2人は何事か、と入り口の方までやってくる。

「……鳳さん、その眉は……」

眉間にしわを寄せて言う村山教諭に瑞葉は

「あ、後で話しますから、とりあえず教室に来て下さい！」

「暁！ 何をしてるんだ御前！」

田原教諭の焦ったような声が響く。天馬が柿谷を踏みつけているのを、苛めていると見たのだろう。

天馬は柿谷を自由にすると、これまでであったいきさつを話した。

「……柿谷、来い」

天馬が話し終えた後、田原教諭は声色をずっと低くして柿谷についてくるよう促す。おそらく彼が連れていかれるのは生徒指導室だろう。

「い、いやでも——」

「来い！！」

田原教諭は怒鳴る。その滅多に見ない青年教師の怒声に、流石の天

馬も少しビクツとした。

次の日。天馬が教室のドアを開けると、まず目に入っただのは柿谷が軽薄な表情で昨日あったことを話していた。

「だからさーめっちゃむかついたんだよ。それで俺がカッター投げたんだぜ。暁の奴、悔しそうな顔して睨みつけてよぉ」

まるで自分が英雄のような言い草にかなりイラッときた。わざと彼の側を通り過ぎるように歩き、通りざまに

「死ねよ。屑」

と一言呟いた。柿谷の表情が憤怒に変わったが、天馬はそんなこと知る由もない。

天馬はさっさと席に着く。と、教室に入ってきた村山教諭が少し戸惑ったような顔をして言った。

「あの、暁君」

「何でしょう？」

「手は大丈夫？」

そう言われて天馬は黙り込む。昨日柿谷に切られた右手は親指以外動かせない。医者からはある程度動かせるようにはなるが従来のようにはいかないだろうとだけ告げられた。

「残念ですが……」

気まずい沈黙の後、天馬は苦い表情のまま言った。

「昨日、県立高校の過去問題を解いてみたら最低ボーダー260点に対し、230点でした。多分……受験はダメですね」

「受験……ね」

村山教諭は悲しげな表情の後、

「……暁君だけに教えるけど……」

「？」

「鳳さん、晴嵐受けなくなっちゃったの」と、言った。

「なっ……」

天馬は絶句していた。鳳瑞葉が晴嵐高校の為、毎日必至に勉強していたことを知っていた。

1度、勉強のしすぎで倒れたこともある。帰ってきたテストの悪さに泣いたこともある。

そうまでして、絶望の壁にぶつかってまで苦勞して、晴嵐高校は受けられない。天馬の心の内に、理不尽な処分に対する怒りがこみ上げた。だが、その怒りを抑えて言う。

「何故、受けられないんですか。受けさせても良いんじゃないですか」

「……眉毛、ね。右の眉の上の方の1ミリ程度を削った程度だけど、それでも高校の先生は分かるのよ。受験者が眉を剃っているっていうのは」

「そ、それでも可能性がないだけで受けさせることくらいは——」

言いかけて、天馬は気付いた。そうなれば上岡中学校の評判が落ち、来年や再来年の受験に影響がでる。

受からない、ではなく受けさせられないのだ。

悔しかった。あの時、自分が教卓の下敷きになっていたとき、動こうと思えばいくらでも動けた。

なのに、動こうとしなかった。その怒りの矛先は、行動を起こさなかった自分ではない

「クソッ……アイツさえ……アイツさえいなければ!!」

HR直前。多くの生徒がバタバタと教室に飛び込んでくる中、天馬は悪態を吐いた。

柿谷は、まるで昨日のことを忘れたかのようにヘラヘラ笑っている。「なんであんな、あんな人を傷つけて、人の希望まで奪うような奴が平気でこの世に存在しているんだ……アイツなんて消えればいいのに……いや、消えるべきなのに……」

「暁君」

爆発寸前の天馬を抑えるように、村山教諭は優しい口調で言った。

「人は誰でも長所や、この世に生きている意味があるの。例えば人を

傷つけて、人の希望を奪うような人間でもね。暁君にもそれが分かる日が来るわよ」

「……………」

天馬は黙って、目に涙を溜めたまま聞いている。と、突然村山教諭は話を変えた。

「でも、暁君は変わったわね」

「え？」

天馬は村山教諭が話しを変えたことに、ではなく、その話題に驚いた。

変わっていない。自分が変わっているなんて思わない。今だって、成績の悪い人間を見下しているし、教師の前で『アイツは死ぬべきだ』と平気に口に出している。多言を嫌い、今1番心の距離が近いであろう瑞葉との会話さえ鬱陶しがってさっさと打ち切ろうとしている。

「変わってませんよ。俺は俺のままです」

「変わったわ。前の暁君だったら鳳さんが試験を受けられなくなったって言われても『フーン』とか『そうですか』の一言で片づけるわ。少なくとも『受けさせても良いんじゃないですか』なんて焦って言うたりはしないわね」

「っ……………！」

「そんな表情をする必要はないわ。誰かの為に焦ったり、誰かの為になることをするのはとっても大切なことよ」

現実主義者：暁天馬は悔しさに目を伏せた。一生使えなくなった右手と、守れたのに守ろうとしなかった少女を交互に見る。

（後書き）

拙作を読んで頂き、有難う御座います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5000r/>

とある神童の挫折

2011年10月7日20時38分発行